

榊原直人は、いつもより早い出社を決めた朝、既に身体の違和感に気付いていた。
大手電機メーカーとの大型商談を控えた重要な一日。
しかし、目覚めた瞬間から全身が重く、視界も若干ぼやけているような奇妙な感覚が続いていた。

高級マンションの最上階に位置する自室で、シャワーを浴びながら額を押さえる。
温かい湯が肌を打つ感触も、どこか遠くで感じているような違和感があった。
タオルで体を拭いながら、姿見に映る自分の姿を確認する。
182センチの体格は変わらず、32歳にしては若々しい容姿も普段通りだ。

「気のせいかな…」

そう呟きながらも、高級スーツに袖を通す手は僅かに震えていた。
ネクタイを整え、腕時計で時刻を確認する。
午前7時45分。
いつもより随分と早い。

エレベーターホールに向かう途中、廊下に設置された観葉植物が、どこか大きく見えることに気付いた。
目眩のせいだろうか。
深い呼吸を繰り返しながら、エレベーターのボタンに手を伸ばす。

その瞬間だった。

「っ！」

激しい眩暈が直人を襲う。
廊下の壁に寄りかかりながら、必死に意識を保とうとする。
冷や汗が背中を伝い落ち、視界が徐々に歪み始めた。
まるで巨大な渦に巻き込まれるような感覚。
周囲の景色が、ゆっくりと、しかし確実に大きくなっていく。

「な…何が…」

自分の声が小さくなっていくのが分かった。
着ていたスーツが緩み始め、やがて巨大な布の山となって直人の体を覆い隠してしまう。
パニックに陥りながらも、何とかスーツの襟元から這い出した時、直人は愕然とした。

廊下は巨大な峡谷のように広がり、壁は摩天楼のように聳え立っている。
自分の身長が、わずか5センチほどになってしまったのだ。
信じられない現実には、直人は何度も目を擦った。

しかし、状況は変わらない。

その時、遠くから聞き覚えのある足音が響き始めた。
カツン、カツンと、高級パンプスの音が次第に近づいてくる。
音の主が誰なのか、直人にはすぐに分かった。
新人秘書の葉山理沙。
入社してまだ半年だが、その優秀さで既に直人の右腕として信頼を置いている存在だ。

黒のスーツに身を包んだ170センチの長身が、巨人のように直人の前に現れる。
艶やかな黒髪を背中で揺らし、完璧なメイクを施した美貌。
普段から美人だと認識していた彼女が、今は圧倒的な存在感で直人を見下ろしていた。

理沙は最初、廊下に散らばったスーツと小さな人影に気付かなかった。
しかし、よく見ると、そこには自分の上司である榊原部長が、わずか5センチほどの大きさに立っているではないか。

「え...？」

理沙は目を疑った。
まるでおとぎ話に出てくるような光景。
しかし、確かにそこにいるのは榊原直人だった。

「榊原...部長...ですか？」

理沙は慎重に膝をつき、小さくなった直人を覗き込む。
完璧なメイクの下で、彼女の表情が僅かに歪んだ。
困惑、驚き、そして...何か別の感情が、その瞳に宿り始めていた。

「理沙君...助けてくれ。
どうしてこんなことに...」

直人の声は蚊の鳴くような小ささだった。
理沙は耳を近づけ、その声に聞き入る。
そして、ゆっくりと右手を差し出した。

「とりあえず、このままじゃまずいですね。
私の手に乗ってください」

直人は差し出された手のひらを見上げる。
まるで小さな丘のように感じられるその手に、恐る恐る足を踏み出す。
理沙の手のひらは柔らかく、かすかに香水の香りがした。

「今日は確か、三菱電機との商談が…」

理沙の言葉に、直人は愕然とする。
そうだ。
重要な商談があるのだ。
しかし、この状態では…

「このままじゃ、部長は商談に出られませんね」

理沙は立ち上がりながら、手のひらを胸の前まで持ち上げた。
直人は高さに怯えながらも、必死に理沙の手につかまる。

「私の部屋で…しばらく様子を見させていただきますでしょうか」

理沙の声には、どこか不穏な響きが混じっていた。
しかし、この非常事態で、他に頼れる相手はいない。
直人は小さく頷くしかなかった。

理沙は廊下に散らばったスーツを拾い集めながら、ゆっくりと自室へと向かう。
その瞳の奥で、何かが目覚め始めていた。
支配欲。
これまで抑え込んできた、歪んだ欲望が。

「部長…私がしっかりお世話させていただきますから…♡」

その言葉に、直人は背筋が凍るような恐怖を感じた。
理沙の瞳に浮かぶ危険な光。
そして、その声に混じる甘い響き。
この状況が、単なる偶然以上の何かを意味していることに、直人はまだ気付いていなかった…。

理沙の部屋は、高級マンションの中でもコンパクトな間取りだった。
しかし、5センチサイズとなった直人にとって、その空間は途方もなく広大に感じられた。

理沙は直人を手のひらに載せたまま、慎重にテーブルの上に降ろした。
高級な木目のテーブルは、直人にとって広大な平原のように感じられる。

「まずは、この状況を整理しましょうか」

理沙は椅子に腰掛けながら、小さくなった直人を見下ろす。
完璧なメイクの下で、彼女の表情が徐々に変化していく。
最初の驚きや戸惑いは消え、代わりに何か別の感情が浮かび始めていた。

「部長、このままでは商談には出られませんね。
私から体調不良で休むと連絡しておきましょうか？」

「ああ...そうしてくれ。
すまない」

直人は小さな声で答える。
理沙は携帯を取り出し、総務部に連絡を入れ始めた。
その仕草は普段と変わらず冷静だったが、時折直人に向ける視線には、どこか危険な色が宿っていた。

「連絡は済みました。
さて...」

理沙はゆっくりと立ち上がり、テーブルに近づく。
その動作に、直人は思わず後ずさった。
巨人となった彼女の存在感は、圧倒的だった。

「部長は、私のことをどう思っていましたか？」

突然の問いに、直人は戸惑う。

「優秀な秘書だと思っていた。
仕事も正確で...」

「そう、仕事ね...♡」

理沙の声が甘く変化する。
彼女は黒のパンプスを履いた足を、ゆっくりとテーブルの上に持ち上げた。
艶めかしい黒のストッキングに包まれた足が、直人の目の前に現れる。

「実は私、部長のことをずっと観察していたんです...♡」

パンプスが床に落ちる音が響く。
直人は息を呑んだ。
目の前で、理沙の足が露わになっていく。

「毎日、部長の横で仕事をしながら...こんな風に、支配したいって思っていました...♡♡」

ストッキングに包まれた足先が、直人に近づいてくる。
彼は後ずさりを試みたが、既に逃げ場はなかった。

「理沙君...冗談はよしてくれ...」

「冗談？違います...これは、私の本心です...♡」

足先が直人の体に触れる。
その感触に、彼は震えた。
恐怖と、そして、言い表せない別の感情が、全身を駆け巡る。

「部長の体が小さくなったのは、偶然じゃないかもしれません...♡」

理沙の告白に、直人は愕然とした。
彼女の足が、ゆっくりと直人の体を押し倒す。

「実は、この現象には私も関係があるんです...♡♡」

ストッキングの質感が、直人の全身を覆う。
理沙の足の重みは、彼を完全に圧倒していた。
逃げることも抵抗することもできない。

「これから、部長には私の思い通りになっていただきます...♡」

足指が直人の体を軽く弄び始める。
その動きに、彼は息を詰まらせた。

「嫌だと思っても...体は正直ですよ？♡♡」

理沙の足の動きが、さらに大胆になっていく。
直人は恐怖と快感が入り混じった感覚に翻弄されながら、自分の意志とは裏腹に、その支配に身を委ねていくのを感じていた。

「さあ、これからが本当の調教の始まりです...♡♡♡」

テーブルの上で、支配する女と支配される男の関係が、静かに、しかし確実に築かれていく。

理沙の足指が、小さくなった直人の体を巧みに弄んでいく。
ストッキングの繊細な網目が、彼の肌に独特の刺激を与えていた。

「部長...私の足の匂い、嗅いでみませんか？♡」